

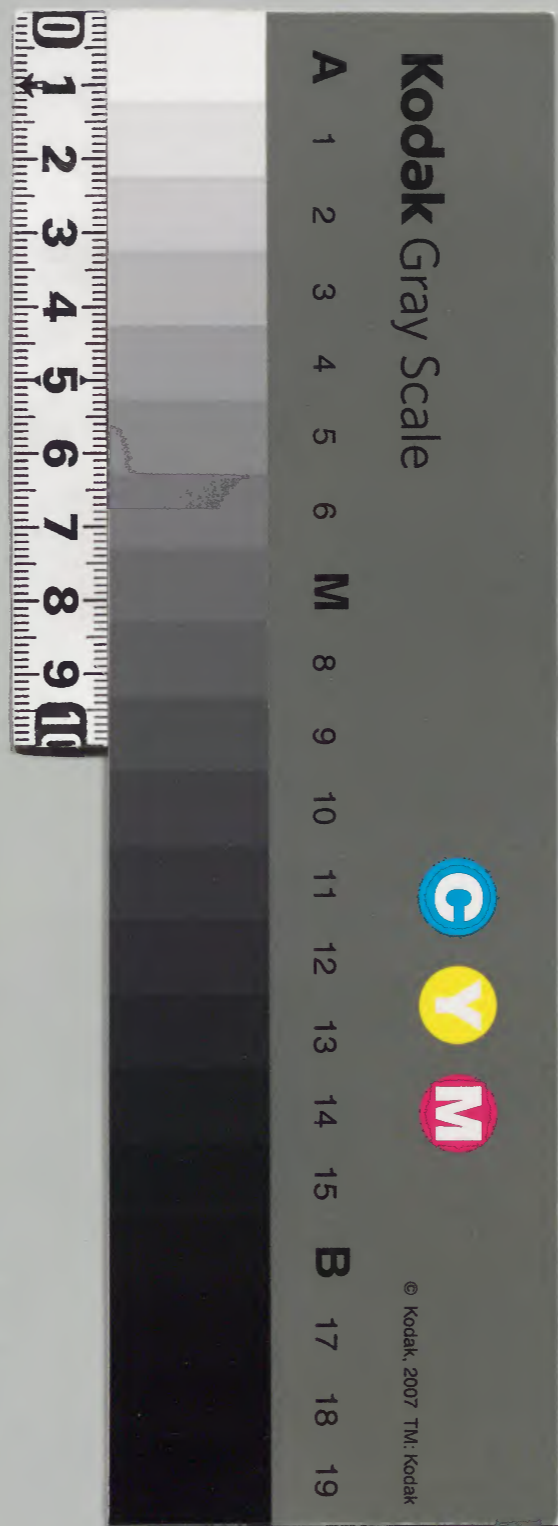
日本書紀傳

廿三卷二

七十五

和書  
一〇五二號

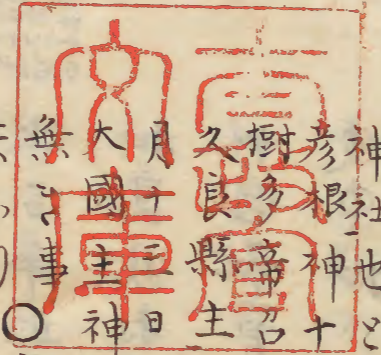
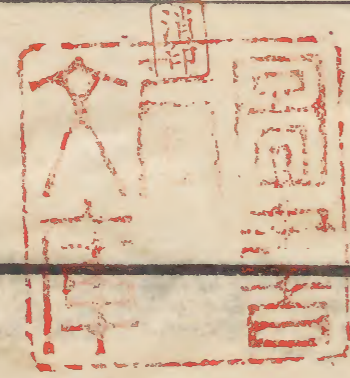
内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 ( 84 )	
函號	特	85 1



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



文部省  
圖書印



神社也。有是。是乃。故其鴨脚家系を見る。小味鉏高。考根神十四世孫。田主臣從。景行天皇征筑紫國。家門。楓。樹多。帝召見之。以蝦手以鴨脚。勅賜鴨脚製歌。賜姓秀。久良。縣主。至後世。以秀倉。孫立藏。天皇五十七年。丁卯。三月。十日。於秀倉里。卒九十二歲。所見。たれ。正。く。大國。主。神。の御末。あり。を更。小脚摩乳手摩乳神。ゆ。無。事。○童女。ハ。次。小。ハ。少。童。之。書。た。れ。即。右。の。少。女。共。ふ。り。○童女。ハ。次。小。ハ。少。童。之。書。た。れ。即。右。の。少。女。又。ハ。賣。能。和。良。波。之。訓。有。ぬ。可。し。

行吉野宮之時吉野川之濱有童女其形姿美麗故婚是

童女還坐於宮後更亦幸行吉野之時雷其童女之所遇

云々尔因其孀子之好儻作御歌其歌曰略麻比須流袁  
美那登許余尔母加母と有小因水ハ袁美那之詠訓ハ  
き狀ありと袁美那ハ童女ハハ稍長と成たりと

日本書紀傳三十三

〇里

内一二六八三號



方葉上平小今更小童  
言為流老人二四年大  
平小老人毛女童兒毛  
如と有るは也  
無童字前漢書小  
十五下謂之童子童  
獨也言未有室之家也  
こんえ礼記小未冠  
之稱也三有れを童  
也十五以下未嫁  
ケテと云ふ用いた  
字云々

和良波倍と云ふ時ハ其群めて弱生部の義あり混同小  
為事勿れ方葉八五下小秋弟子乃字礼和ニ良葉尔  
と有ハ未弱在弱在葉小と云事少て弟子の末の境  
た多意あり源氏螢卷三小人狀の和良ニ加小氣近  
聞え給へば植柱卷三十三小和良ニ加ある氣も無き人  
若葉上三十一小和良ニ加小云こと有る河海抄小和字  
を以て註させ給へるも右小同一言あるが故あり  
又女々卷小未甚伎毘和ある程を云々姫君の御狀の  
甚伎毘和小美く一うて云々伎毘和小清くある物

云事常ふれハ猶衰登賣ふり其下小又天皇婚九迹之  
佐都紀臣之女衰持比賣幸行予春日之時媛女逢女云  
ニ其御歌曰衰登賣能伊加久流衰加衰略下有を合セ  
讀て知べハ常陸風土記香島郡條小以南童子女松原  
古有年少童子俗曰加味乃平止と有る加味ハ神小て  
美称あり童子女ハ童子女童女を重和名故小此を平  
止古平止賣と訓へる徴是あり然るも童礼記云和名  
和良波未冠之稱也と見え依子讀師説和良波倍童男  
女也童男平乃和良倍童女女乃和良倍と有る其和良  
波の和ハ傳六七十十五百八十小註と如く常小婦人

△土佐日記小若さ扣  
良波又初めき和良  
波の稱有る又上の  
如く女の和良波こ  
も見申す女和良波  
とも云々

を平弱女と云ふ弱是少て良ハ其形狀を云ひ和良波  
和良倍の波と倍とハ生の義少て弱弱生ある可く又  
和良波倍と云時ハ其群めて弱生部の義あり混同小  
為事勿れ方葉八五下小秋弟子乃字礼和ニ良葉尔  
と有ハ未弱在弱在葉小と云事少て弟子の末の境  
た多意あり源氏螢卷三小人狀の和良ニ加小氣近  
聞え給へば植柱卷三十三小和良ニ加ある氣も無き人  
若葉上三十一小和良ニ加小云こと有る河海抄小和字  
を以て註させ給へるも右小同一言あるが故あり  
又女々卷小未甚伎毘和ある程を云々姫君の御狀の  
甚伎毘和小美く一うて云々伎毘和小清くある物



瘦衰へて比和豆小  
う又

ら云に又篝火若菜下竹川等の巻に小も所見たり此  
和と被<sup>波</sup>誤れり河海抄小推日本紀と有れ此御紀  
の中<sup>波</sup>然<sup>波</sup>訓も有<sup>波</sup>可<sup>波</sup>け<sup>波</sup>れ<sup>波</sup>今<sup>波</sup>本<sup>波</sup>無<sup>波</sup>此  
を註者弱きあり幼き時ハ何事も氣弱きありと云  
ハ然る言ひて其横柱巻小比和豆少了髪甚清ら少  
云々竹川巻小甚若<sup>波</sup>此和豆ありと云々有<sup>波</sup>一本  
小伎毘和と有れハ其近き語ありを知<sup>波</sup>此言ハ古  
事記日代宮段歌小斗迦麻迹佐和多流久毘比波煩曾  
多和夜賀比那衰と有ハ敏鎌小真渡<sup>波</sup>杖弱細手弱眩  
をも云事ある由記傳十<sup>波</sup>巻小註れ<sup>波</sup>を見<sup>波</sup>了<sup>波</sup>可  
一右等の伎毘和又此<sup>波</sup>和豆の和と和良波の和と共小  
同<sup>波</sup>く<sup>波</sup>して弱く幼稚き事あり因云遊仙窟小兒を和  
良波と訓たり○吾兒を此ハ素戔嗚大神小申す所あるが故  
小謙退る義を以て夜都加礼我古と訓に次あるハ自  
其生る子の事を語る所あるが故小阿<sup>賀</sup>我古と訓別た  
の<sup>波</sup>此小例すれば下小吾兒宮首と有ハ素戔嗚大神の

△此第<sup>五</sup>書<sup>二</sup>後  
吾兒所御之國不有  
浮寶者未是佳也

已尊の御子の事を詔せる所ある故小阿賀美古と訓  
へき事本よりの事あり御紀の例君長小對ひて己が  
事を申すハ何時も吾又ハ僕字を書て夜都加礼と  
訓む事あり即奴我<sup>波</sup>と云事の切すれ<sup>波</sup>由己小傳十五  
七小註るが如<sup>波</sup>又阿賀<sup>美</sup>古<sup>波</sup>云例公天孫降臨章第<sup>六</sup>  
一書小是吾兒<sup>波</sup>可王之地也<sup>波</sup>其<sup>波</sup>葦原千五百秋之瑞  
穂國是吾子孫可王之地也其第二一書小吾兒視此寶  
鏡云<sup>波</sup>以<sup>波</sup>吾高天原所御齋庭之穂亦當御於吾兒云<sup>波</sup>  
皇孫曰雖復天神之子如何一夜使人娠乎抑非吾之兒  
歟と有ハ更あり古事記御天降段少も天照太御神之



命以云々我御子正勝吾勝ニ速日天忍穗耳命云々此  
 葦原中國者我御子之所知國言依所賜之國也云々汝  
 之字志波祁流葦原中國者我御子之所知國言依賜云  
 々吾御子爲天降之道誰如此而居云々佐久夜毘賣一  
 宿哉好是非我子云々其白禱原宮段小我之御子等不  
 平坐良志又景行天皇四十年御紀小形則我子實則神  
 人々有あゝハ君上ヨリ下小對ひて詔給へる所あり  
 け水ハ阿賀美古之訓べき事奉りあり古事記ハ此  
 書れたる故小正しく我御子と書れたるを御紀ハ漢  
 文体小作れ簡古を主と爲ると以て吾兒又ハ我子  
 と書さ又阿賀古と云ハ古事記御天降段小我子者

不死有祁理我君者不死坐祁理云々有リ次小天神の  
 御使の我御子と述給へる小答へ奉りて大國主神の  
 僕者不得白我子八重言代主神是可自然と見元又今  
 汝子事代主神如此白訖と有小對へて亦我子有建御  
 名方神と申給ひ次小女子等事代主神建御名方神ニ  
 神者云々と有小對へて僕子等ニ神隨白僕之不違と  
 申給ひ次小亦僕子等百八十神者即八重事代主神爲  
 神之御尾前而仕奉而仕奉者違神者非也あど有リ万  
 葉四四十九九小念有之吾兒乃乃自緒又五十五五丁丁縁乎奈弥念  
 而有師吾兒羽裳河吟五三十九九丁丁小白玉之吾子古日者九



三十 小吾子羽畏天乃鶴群あど見ゆ何れも阿賀古と  
 訓べし阿賀との和賀との差別ハ已小傳六卷 十  
 武天皇戊午年御紀大御歌の(結)句小阿誤豫阿誤豫と  
 見え又皇軍大悦仰天而咲と有(結)歌の終小其語有  
 を私記小阿誤小兒也猶言我兒也と有是あり源氏  
 を親卷少阿暮ハ知と有を註ふ幼少の者  
 と云ありと有り ○奇稻田姫と第二一書小ハ真髪觸  
 奇稻田媛と有り古事記小ハ擲名田比賣と作す熱田  
 縁起小ハ擲稻田姫と作り出雲風土記飯石郡熊谷郷  
 條小ハ久志伊奈太美等與麻奴良比賣命と見え神名  
 式小ハ山城國相樂郡綺原坐健伊那太比賣神社能登  
 國能登郡久志伊奈太伎比咩神社と所見たり名義

後偶

ハ擲戴あり可長下小故素盞鳴尊立化奇稻田姫爲湯  
 津凡擲而掬於御髻と有る此御事小依り御名と聞  
 元たり古事記小ハ速須佐之男命乃於湯津凡擲取  
 成其童女而刺御美豆良云熱田縁起小ハ素盞鳴尊  
 立化擲稻田姫爲湯津凡擲掬於御髻云と所見たり  
 是少其八岐大蛇を言向させ給ふと此女神を  
 立化小湯津凡擲小取成一給冬下抄云々艾偶女を作して其影を酒槽小移して  
 實小其童女と令思其酒を令飲醉を給ふと謀させ  
 給ひ人其神策の當めて終小亡ぶと給へると以て  
 其奇異と所以を以て久志伊奈太伎比咩命ハ御

書紀傳三十三

〇甲五



名小負せりハ本ありと又其宮を稲田宮と申して田  
小由有る事の御在り坐小就て伊奈太伎の伎を略さ  
て稲田の義ある御名小定まはる者ありけり借此伊  
奈太伎の事ハ瑞鏡盟約章珠の髻鬘かの二字を合せて美  
伊奈太伎と有ハ共小頭頂小在る物あるが故あり此  
小掬於御髻と有ハ即掬於御頂と云も如くして已  
小傳十五百十小列了万葉二十九丁小阿母乃自母多  
麻尔母賀母夜伊多太伎且美豆良乃奈可尔阿麻籬可  
麻久母と有て髻を詠ふ其三四十小伊奈太吉尔伎  
須賣流玉者無二云と有て其同下事を此小ハ伊奈

又新撰字鏡ハ  
髻を伊奈太伎と  
有

本と雖も此ハ御髻の  
玉小依れり御名ハ  
状あり故其

太吉と云ふを以て考合す可其髻鬘の事小就て釋  
秘訓小師説弘仁私記  
有兩説一説連讀髻鬘伊奈太伎一説爲美豆良然則兩  
説可兼用也云の説も有る事ありとも右の二歌を  
合せて證と爲る右の久志伊奈太美等與麻奴良此賣  
命と申す久志伊奈太ハ右小云る擲イナキ戴髻より出て轉  
りて稲田の字の意と成て下小稲田宮主神に有る其  
如く御由佃の事小功坐る故の御名と成る事下言ハ十  
六丁  
小云か如く美等與ハ瑞豊あり右の稲田の縁あり其  
瑞ハ瑞ハ坂瓊之曲玉あどの瑞あり豊ハ豊玉神又豊  
玉彦神豊玉姫命と申す豊あり例の豊饒ある義あり  
麻奴良ハ真瓊マヌラ在りて八洲起元章小瓊玉也此日努と



有る是あり其傳六十四十五百十小註々を見て知  
べし然れば此ハ擲髻瑞豐眞瓊在姬命と申す意の御  
名（之下四十一云ふ如く彼大蛇を退治させ御在坐ける時小負給へる）より然る物少て奇稻田より水豊と兼け眞渚左  
と續きて農作（ナリ）の事小係列へる義あり所見たりける  
田小渚を云ハ天孫降臨章第三一書小狹名田（奴）並び  
て渚浪田の称見え和名枚郡名小安藝國沼田（奴）同郷  
名小常陸國新沼郡沼田上野國利根郡沼田（奴）未安藝  
國沼田郡沼田あざ有る是めて謂ゆる沙田（イカサカ）の狹名田  
小對へて渚田（ヒナ）を渚浪田（ナリ）云ありけり故此御名ハ  
玉を以て其御容儀の御事を称奉り田を以て其

等 称

御農作の御功を以称奉る小をむ當れる者と所見た  
りける但出雲國楯縫郡沼田郷有れども此ハ別義本  
治比古命（イ）以多水而御乾飯（イ）多食坐詔而尔多負  
給之然則可謂尔多郷與今人猶云努多耳神龜三年改  
字沼田（イ）有乙尔多ふれども田沼田（イ）云事の有小  
引れて終（イ）努多（イ）云事称ハ成れりしありけり借  
又右の麻奴良（イ）同言有り万葉十六卷小楯熊来酒  
屋尔眞奴良留奴和之佐須比立（イ）率而末奈麻之矣眞奴  
良留奴和之有ハ眞瓊在之鷲（イ）云事少て其羽の美  
麗（イ）きを美称て云称ある小や然れば此ハ其意も等  
りけり謂ゆる神名式小山城國相樂郡綺原坐健伊  
那太比賣神社の此鎮坐す所由詳あらずも雖も強て  
思ふ小傳十五百十小註せる同國綴喜郡樺井月神社  
大月次 又同郡月讀神社 大月次 御在坐り其御由縁  
新嘗



小就て鎮山御在坐す御事小くハ有べし  
然るハ往ニ云ルガ如く月夜見尊尊と申奉るハ素戔鳴  
尊の亦御名少シハ渡らせ給へりけるハ己小傳八六  
二小註る神名式ハ出雲國意宇郡賣豆紀神社と出た  
るを清和天皇實祿ハ女月神ニ所出たも其  
天神を月讀壯子又ハ月人壯子又ハ左佐良接壯子  
申奉る准ルハ小其后神をハ女月神ハ称奉ル  
おめり若て其女月神ハも称奉る神ハ誰ハ坐む此奇  
稲田姫命小渡らせ給ふ可けれハ愈以て所縁有る事  
とハ思えたる又傳十五二百七ハ十八ハ如く古小

山代國と云けるハ宇治川より以南の地也今ハ  
宇治久世綴喜相樂の四郡を云る小出雲風土記小意  
宇郡山代郷郡家西北三里一百二十歩所造天下大神  
大穴持命御子山代日子命坐故云山代也即有正倉  
有ハ其國より出坐て山代國を造給ひける由小因れ  
る神名と通えたるを其賣豆紀神社の所在今ハ山代  
郷津田村と云小御在坐すも事合たる心ちするハ  
若くハ其社より右の綺原社ハ移レ奉りたる者あり  
小ハ和名抄御名小宇治郡大國と有ハ大國主神小  
由有る地名ありしを其月讀尊健伊那太比賣命ハ



御子と坐し山代日子命小御父ありし由有けり  
事共なり傳三十三若て其綺原ハ同抄郡名小相樂郡蟹幡加無波多  
と有る是ありしが垂仁天皇三十四年御紀小天皇幸山  
昔云ニ此國有住人曰綺戸邊云ニ山皆大國不避之女  
也云ニ先是娶山皆苜幡戸邊云ニと有て綺苜幡  
を被分たれども古事記ハ娶山代大國淵之女苜羽  
田ハ乃辨云ニ又娶其大國淵之女弟苜羽田乃辨云ニ  
も書せれハ綺字も本ハ加理婆多と云けるを和名抄  
の項ハ己小理を無と記れるありけり其綺原ハ加牟  
婆良と訓じ事ありしが其相樂綴喜二郡の畧あり泉河

の渡を樺渡と云ひ其綴喜郡あり樺井と云名も苜羽  
渡又苜羽井ありつゝむを其二郡小跨れる地ありと  
以て其称の別ありしと有けれ其本一ありけむと  
思ふ可し然るも右の樺井月神社大月次綺原坐  
健伊那太比賣神社同古の苜村田の地小鎮ハ御在し坐  
す事實小謂有る事少て此も亦月夜見尊素戔鳴尊の  
同一神少て渡らせ給へる確證小備ふ可し者ありけ  
り然るを其苜羽田より蟹幡と轉れし小就て此綺原  
坐健伊那太比賣神の古小名高く御在し坐ける小  
就て苜僧の妖言こりハ出来小たれ其御社今も綺田  
村の南一町許平林の中ハ御在し坐を俗小梶原社と  
申す云ハ景時と云者の靈を祝れしと云ハ土人  
の誤あり然る苜曲の者を何ぞ後人の追尊して祭る







上古の神跡と所見たり又新沼郡鴨大神御子神主  
 神社と有る鴨大神ハ事代主命小坐る少其神主神ハ  
 懿徳天皇御紀小淳名底仲媛命事代主神孫鴨主女也  
 と有る其鴨主命の事小して奇稻田姫命の尊孫有る  
 小二十八社鎮座紀（紀）小在中郡莊鵝毛邊村今賀茂村也  
 所祭大田根子命と有るか如く其地名小さへ了るも  
 又由縁有る事小あむ有ける此稻田神社の御事を二  
 十八社鎮座記小今属茨城郡在稻田村所祭奇稻田姫  
 命今祠二許町上是謂奥宮舊趾と所見たり然る小素  
 御在（す）坐御社式（す）ハ所見ず其（筑）新沼郡御名小月  
 波都木波と有るハ由有げあれども其稻田神社の各神

又筑波（筑波）云山名ハ  
 古名曰筑波之縣古謂  
 紀國美高買天皇之  
 世遣家臣友屬筑  
 波命於紀國之國造  
 時筑波命曰欲令身  
 名者著國而後世流  
 傳即改本號更號  
 波者有て筑波  
 云山名ハ神代云  
 後の神呼ふれども  
 式外と近江國（近江）  
 社を三才國（三才）當小保  
 神と有る小名云て

大社少て渡り給へる小其天神の式外少て御在  
 坐しり合され若く筑波郡筑波山神社名神  
 大一大一小と有る筑波山の神社と申（筑）少てハ魚  
 筑波の山神社ある少て稲田神社の御鳥ハ御祖父  
 母少て渡り給へる少てハ非ハ其ハ風土記小昔祖  
 神尊巡行諸神之處到駿河國福慈岳云此時筑波神答曰云此時福慈神  
 答曰云更登筑波岳云此時筑波神答曰云此時福慈神  
 小其福慈神ハ同式小駿河國富士郡富知神社坐る小  
 其風土記小不二神社大山祇之命也云と有る是ハ  
 此を以て見れハ其筑波神と云も同ト大山祇命小  
 御在坐を其山ニ鎮坐す御靈の御事あり然（筑）西飯  
 常陸風土記信太郡條小郡北十里碓井云其里西飯  
 名社此即筑波岳所（筑）有飯名神之別属也と有る其山  
 小御在坐す神少て飯名ハ飯坐の義と見申れハ即  
 保食神あり小坐す小大忌祭詞小御膳持須留若宇  
 加能賣命登云（筑）倭國能六御縣乃山口尔坐皇神等前  
 尔毛云と有て山神と保食神とハ殊小親（筑）近江國  
 御在坐を思合す可（筑）其筑波命の本居も近江國  
 あり小坐る保食神を其山小移奉り相殿あり  
 御在坐あり可（筑）万葉九卷登筑波山時歌小鬼神

筑波山神傳三三

〇五十一







又當郡白比古神  
社坐八傳芒注  
小註ふか如く素多  
鳴大神小注ふ世  
給ふる心考言可

鎮坐り又満汐珠有り奇瑞有る靈顯あり大祭ハ二月  
初午小能登生國玉比古神社ハ神幸有て二夜を経て  
歸る世給ふ略と有る其三神共鎮坐す神幸成社御事社渡  
せ給ふ御事あれハ此國小所由有る事右の如く又  
十九下小註ふか如く神名式小武藏國足立郡氷川神  
社名神大月次新嘗と有ハ素多鳴尊奇稻田姬命大已  
貴命三神少て渡らせ給へるか上小其入間郡中氷川  
神社を頭註小日本武尊東征之時勸請稻田姬命也  
有る外小猶諸國小○所以哭者ハ右小汝等誰也何爲  
哭之如此耶と問ハせせ給へる小其哭居事事情と  
明るめ奉り語あり古事記素菟段小大穴牟遲神見  
其菟言何由汝泣伏と有る對へ進らせ給へる語の終小

因此泣患者と有る文体小彷彿たり○往時ハ佐位佐尔  
と訓來り古事記ハ自本と有る所あり○吾兒ハ  
阿賀古ある事已ふ云り新宮本ハ吾兒者と有然  
ハ阿賀古村母と訓ハ古事記國避段小汝子等と云  
ふ對小僕子等二神隨百僕之不違云と亦僕子等百八  
十神者云と有る例是あり又此を熱田縁起ハ僕  
とのと有る其夜都加礼僕と訓むも悪く又此所を古  
事記ハ我之女者自本在八稚女と有て下ある須佐  
之男命の御言小是汝之女者奉於吾哉と對へたり此  
も下小若然者汝當以女奉吾耶と有て此の吾兒小對  
へ云れたり吾と汝とを並べり心用ひ右小異



了あゝ〇八箇少女ハ夜都多理能哀登賣と訓來れハ  
 夜多理と訓む時ハ弥人ヤタリの善義成るを此ハ真敷の八  
 人あり故ハ夜都多理ハ云るして四神出生童第  
 六一書ハ八人を夜都比登と訓たるハ其意味同ト  
 する可ト諸此事を古事記ハ八稚女オカ作れ熱田縁  
 起ハハ八女子カ有リ其を夜衰登賣カ訓る例ハ神宮  
 雜例集ハ今丹波國與佐乃比治乃真魚井坐道主王子  
 八乎止女乃齋奉御饌都神止由居乃神乎高橋氏文小  
 大八洲乃像天八乎止古ハ乎止咩定天神齋大嘗等仕  
 奉始支あど有リ右神齋云ハ神今食の御事を申  
右古の八乎止古ハ乎止咩の事

を儀式ハハ社男ハ社女ト書されたり即江次第小  
 謂申る十男十姫の事ト有るあり委ハ中臣壽詞  
 講義第十條〇毎年新宮本ハ毎生ト有リ古事  
 記ハハ毎年來喫ト有る記傳ハ登斯基登ルと訓れ  
 小從ふ可ト凡此言ハ當リヤ万葉ハハ五十七小得  
 志能波尔波流能伎多良婆十六小常哉將戀弥年之  
 羽尔十七六丁小安利我欲比伊夜登能波尔又四十  
 守里我欲比伊夜登之能播仁十八三十小往更年能波  
 其登尔十九二丁小如是已曾弥年能波尔又四十如是  
 許曾見爲安伎良目未立年之葉尔ト有リ又六十小每  
 年如是裳見壯鹿十九小每年梅者閑友十九二十小每



年尔結之走婆又十六 每年尔來喧毛能由由惠ト有て下  
小毎年謂之等之乃波ト云ふ細書見えたり其小從  
ふ時ハ此の毎年も然訓へくして登斯暮登トハ云べ  
くざるハ似たりと雖も登斯能波ト云ハ年之經ト小  
て年序の來經ト不就トたる言あり然るを登斯暮登ト云  
時ハ其歳年を経て行ハ内小其節トの有ト事トを捉へて  
云語あり故右小引る中ハ往更年能波其登トも  
詠るありけり然ハ每字小當る暮登ト云訓ハ則  
如くして毎見毎聞ハ見別ト諸右の異本小毎年を毎生  
聞別ト云ハ異あり見別ト諸右の異本小毎年を毎生  
と有も僻事ありず第一一書ハ我生兒雖多毎生輒有

ハ岐大蛇來吞不得一存と有る是小引合ふ事ありハ  
然る本も亦有て傳りつるあり但右ハ此神正姪  
身と云ひ今當且産恐亦見吞と云ひ至産時必彼大蛇  
當戸將吞兒焉と云ひ是後以稻田宮主箕挾之ハ箇耳  
生兒眞髮觸奇稻田媛云々有ハ甚く異あり傳あり  
ハ此も毎生と有る本小依るとも右等の事を此小取  
て心得べきハ非ずあり有ける○ハ岐大蛇ハ熱田  
縁起ハ尾ハ岐大蛇と有り下小果有大蛇頭尾各有  
ハ岐と有を對へ考ふ小若ハ頭尾ハ岐大蛇と有け  
る亦知べり古事記ハ是高志之ハ俣遠呂智



○香具山日記  
八常世存大蛇と  
云こと云る常世  
國名と云る常世  
不所と云義よハ  
有べつと云りて其  
常世黄泉國よ  
属る和神の謂  
さる可一若てハ  
岐と云ハ

△下百六十丁云る有  
大蛇頭尾各有  
八岐の所云る事  
共を考合す可

紹

云ニ尔問其形如何云ニ身一百八頭八尾と有是子  
て其意明くけし常陸風土記久慈郡餘小松樹八侯と  
云事の有ハ弥侯の意と通ゆれども此の八岐ハ正一  
く敷のハありけし事右の八頭八尾ハ更あり下小蔓  
延於八丘八谷之間と照應ふ文有を以て知られたり  
其ハ弥丘弥谷ありし事ハ天孫降臨章第ニ一書小  
時味高彦根神光儀花艶映于二丘二谷之間と有て  
其下照媛命の歌句の中ハ七弥多尔輔艳和艳邏須と  
有る即右の二丘二谷の事ありと以て此ハ八頭八尾  
ハ非ざる大蛇を袁呂智と云事ハ通證小字呂尾也  
思ふ可一△大蛇を袁呂智と云事ハ通證小字呂尾也  
知雷也有尾而可畏之義と云るハ然る言ふハ和名枚  
小蛇和名倍美一云久知奈波日本紀私記云字呂知と

有る倍美ハ這身と云事あり久知奈波ハ口之延少  
口の長く開きたるを云ある可く字呂知と云ハ稍長  
延たるを云称と思しければ尾有雷と云説信小云れ  
たりと云べし蛇下百六十丁云る事あり其小雷と云事ハ傳十一五十丁引て云  
るか如く雄略天皇七年御紀ハ乃登三諸岳捉取大蛇  
奉示天皇天皇不齋戒其雷也二目精赫と有る是ハ  
リ地神本紀ハ此八岐大蛇の事を素戔鳴尊乃按所  
帶十握劍寸斬其蛇此蛇為八段每段成雷惣為八雷飛  
躍昇天と有て其相等しき物ありを曉る可一又傳十  
百十丁引る常陸風土記小新治郡驛家名曰大神所以







りけり樋河上天淵記小又此去河上二里有餘有深溪  
名天淵即大蛇之窟宅也之所見たれ其高志國より  
通ひて此小潛り川住て人を悩ませり者ありと  
り心其常居小ハ非り可其前文小山陰道出雲州仁  
多郡三澤郷樋河上天淵者  
上古海潮來注之溪曲也今既潤水衰然為漲流洄狀  
之淵矣云天地之神之交有八岐蛇而居其中焉云  
來栖る者あり然るを此下小此八岐大蛇を斬給へる  
所小素戔嗚尊曰是神劍也吾何敢私以安子乃上獻於  
天神也有此事を天淵記小素戔嗚尊奉劍天照太  
神太神曰我屏天岩屋時落此劍江易伊布貴山是我神  
劍也之所見たれ是時小天上より其伊吹山小落下れ

△素戔嗚尊在出雲  
國新八岐地屋中有  
神劍所謂天村雲氣  
也尊獻之天照太  
神大神云是入名  
時限於近江國伊  
賀山乎惟日本云尊  
所佩之劍乃素戔嗚  
所獲于蛇尾者也  
故八岐蛇豐為水其  
舊物而寄于尊之  
行道也

り所由已小傳十九百六小註十丁が如一此小就て師  
説小此八岐大蛇又尋常の大蛇小非ず其伊布伎山小  
住る多美比古命亦名ハ夷服岳神云小荒振る神  
の化れ少て出雲國まで住通りて人を取り喫へ  
るなりけり云々ハ實小卓見あり其ハ神社考  
小謂膽吹神為八岐大蛇之所變也と有小依りたれ  
者ハ其神社考の説必受る所有て記せり者不  
りけり其ハ竹生島縁起小大日本根子彦太瓊尊号  
靈天 二十五年乙未湖水湛而此島顯出也此御宇霜速  
彥命生三兒氣吹雄命坂田姬命淺井姬命天降坐豐葺



原水總國箇中氣吹雄命坂田姬命二神下座淡海國坂  
田郡之東方淺井姬命下座淺井郡之北邊淺井姬命  
與氣吹雄命競勢爭刀更太北邊下坐海中其下海音云  
都布都布故云都布天嶋略下云事有川此江湖の湛始  
收事を神社考ハ考靈天皇四年江州地折湖水始  
湛駿州富士山忽出焉景行天皇十年湖水初涌出云見元皇年代略記首書ハ孝  
昭靈天皇第五年近江國水海湛始と有て一年の差有リ  
又皇代記首書ハ孝靈天皇五年近江湖水始湛富士  
山初出と云ハ又成務天皇十年庚辰近州湖中竹生島  
初出之所見たるふと其説區々して更不定とぞ

あり然ハ有れども其富士山の事ハ万葉三二十小天  
地之分時從神左備年高貴寸駿河有布士能高嶺字々  
有れハ太古より山あり事論無きを其次歌小日本  
之山跡國乃鎮十方座神可聞寶十方成有山可聞とも  
有れハ本より國の鎮小置給へり又常陸風土記  
小福慈神筑波神の祖神尊巡行諸神之處と有る皆神  
代の事と聞ゆれば右ハ謂申る湖水と共ハ成出たり  
とハ云難き程の事ありけり然れども湖水の此ハ湛  
ハ竹生島の其時小顯出たりと云事ハ必しも其孝昭  
天皇二十五年乙未小寶ハ在つ事右の如くありむ



を其霜速彦命以下の神等の其御世小天降坐りと云  
事ハ後人の其小係たる文と見えたり決めて神代の古昔  
あらずしてハ右に引了天淵記ハ合ハズ又神社考小  
謂膽吹神爲ハ岐大蛇之所變也云小違ハ可クヤ侍  
此縁起の事色葉字類抄ハ出テ竹生島在近江  
國此島坐神依中臣奏上神奉授從五位上勲八  
等昔淺井姬命與氣吹雄命競勢争力去丸邊下坐海中  
云即件神疑水注而爲磐積風莖而作島云又此島  
有大鯰長千丈也纏島數廻首尾相咋又有一蛇長數丈  
也從宇治川登到居此島之上と見えたり共小古傳と  
見諸帝王編年記ハ霜速比古命之男多美比古命  
是謂夷服岳神也女此依志比女命是夷服岳神之姪在  
於久惠峰也次淺井比吟命是夷服神之姪在於淺井岳

也是夷服岳與淺井岳相競長高淺井岡一夜增高夷服  
怒拔刀劔殺淺井姬之頭隨江中而成江島名竹生島其  
頭字と所見たるも縁起と同一傳ありが如此ハ上  
古ハ氣吹山と淺井岳とハ長高相等と云つと  
氣吹雄命の怒ハ依テ淺井岳の頭を斬た是音都布  
都布と云けり竹生島と云名ハ起りつる者なり  
けり故其霜速彦命と云ハ次ハ決西籠神の属あり可其  
霜と云ハ万葉二丁ニハ吾崗之於可美尔言而令落雪  
之摧之彼所尔塵家武と有る是あり但此神ハ天降坐  
ずして石の三子の天降れるあり若て其多美



比古命云ハ立水考云事ハ了和名抄小暴雨揚氏  
漢語抄云白雨和名無良左女有是此暴雨を万葉以  
下の歌小由布陀知詠るハ割た本綿を立た  
如月状を以て云ハ又同抄小潦和名尔ハ豆美雨水  
也と有も庭立水云事多同トけれハ暴雨を主  
謂多ふ也其ハ景行天皇四十年御紀小日本武  
尊云於是聞近江膽吹山有荒神即解劍置於宮篁媛  
家而徒行之至膽吹山山神化大蛇當道爰日本氏尊  
知主神化蛇之謂是大蛇必荒神之使也既得殺主神其  
使者豈足求乎因跨蛇猶行時山神之與水零水零霧谷

曠無復可行之路乃捷遑不知其所跋涉然凌霧强行方  
僅得出有是此零水を古事記ハ於是零大水雨打  
感倭建命所見たり是其神を多美比古命云ハ  
所以あり又此を氣吹雄命云ハ氣吹ハ右小峯霧谷  
曠云々有是即其氣吹の事ヤ一て此ハ云と成り  
雨と降る是あり但右の編年記ハ此依志比古命有  
の事ハ古事記ハ日枝山と有を後ハ此與志ハ近  
江國滋賀郡日吉神社名神大ハ有を後ハ此與志ハ訓  
るハ住吉ハ須美能延多を須美與志と唱ふ例の  
如ハ雖も本ハ此延志云ハ右の如ク大蛇の住ハ  
けむし知べク若て氣吹ハ右の如ク大蛇の住ハ  
て常ハ雲霧の立覆へるをハ吉ハ大空ハ晴度れ了謂  
ハ今試ミハ云ハ然ハ此ハ上ハ三ハ下ハカ如



△氣吹命八岐大蛇  
 化素戔嗚尊  
 殺之奉<sup>つ</sup>も彼  
 神靈也<sup>小遺</sup>りて  
 彼孝昭天皇五年  
 小治井姫命<sup>等</sup>力  
 競争<sup>り</sup>小<sup>程</sup>かり  
 ハ實<sup>ハ</sup>荒神<sup>ト</sup>有<sup>リ</sup>  
 然<sup>レ</sup>彼

く〜〜〜氣吹の山神と鳥上の山神の相争競ふ〜〜  
 例の大蛇の成て行向ひて年ニ其足摩乳牟摩乳神  
 の女子を喫ひ盡して終ふ其老夫婦をも吞てむと  
 ハ爲つる者ある可〜故是を以て古事記ハ其本國  
 を指て高志之ハ俣遠呂智とハ云るありけり又其神  
 社考ハ謂膽吹神爲ハ岐大蛇之所變也と有ハ合ひて  
 天淵記ハ日本武尊東征の御事を書して此尊上洛  
 時江州伊布貴山麓先ハ岐蛇靈出黒雲爲怨欲奪寶劍  
 也尊舉御足蹙殺給仍毒氣止云々有<sup>ハ</sup>此時小至  
 りて全く其神の妖氣止て後世其人を惱ます事と聞

ざる日本武尊其神靈と彼寶劍小留めさせ御在り坐  
 て彼熱田神宮小鎮の御在り坐ハ爲小終小其荒神も  
 心<sup>和</sup>して皇御孫尊の大御世を護奉る事ハ成れ  
 あり可〜神名式小近江國坂田郡伊夫伎神社文徳天  
 皇實録小嘉祥三年十月乙巳朔壬子授近江國伊富岐  
 神從五位下清和天皇實録小貞觀元年正月廿七日甲  
 寅奉授近江國從五位下伊富岐神從五位上同九年四  
 月二日辛未遺神祇大祐正六位上大中臣朝臣常道向  
 近江國伊福伎神社奉弓箭鈴鏡陽成天皇實録小元慶  
 元年十二月廿五日授<sup>近</sup>近江國正四位下伊富岐神從



三位に見えたり但貞觀元年と元慶元年との間今  
 一度進階の御事御在し坐つゝむを記し漏されたり  
 又同式小美濃國不破郡伊富岐神社文德天皇實錄小  
 仁壽二年十二月癸亥以美濃國伊富岐神列於官社清  
 和天皇實錄小貞觀七年五月八日授美濃國從五位下  
 伊富岐神從四位下同十一年十二月五日授美濃國從  
 五位上伊布貴神正五位下陽成天皇實錄小元慶元年  
 閏二月廿一日授從四位下伊富岐神從四位上と有り  
 然（い）右の貞觀七年の度あり近江國伊夫伎神社  
 の進階ありと誤りて此のハ入れざる可くして

△到出雲國飯川上  
 所在鳥上之峯時  
 彼處

△信大蛇ハ古と云  
 何と云ふかハ如  
 隆天皇五十五年御紀  
 小右大蛇ハ強願月自  
 事也云々云々云  
 事も有り

打合ざるあり此伊富岐神社の岐を秘釋本ハ伊夫伎小作  
 驛北一里許今稱伊吹大明神考小在伊吹村去垂井  
 云書小野上村五六丁北あり野上伊吹西邑の社あり  
 古代ハ大社あり祭神鷓鴣草菅不合尊也云れど  
 も更ハ由無き事あり其ハ此神の后豐玉姬命の御子  
 生坐す時小方産化爲龍と云事の有る事事の混れ  
 て彼ハ岐大蛇の事を然思ひ誤れ者少甚可畏  
 き事あり諸此胤伊吹山ハ近江美濃兩國ハ跨  
 可（○）所吞ハ第二一書ハの告素戔鳴尊自我生兒雖多  
 每生輒有ハ岐大蛇來吞不得一存と見え第四一書ハ  
 有吞人大蛇と有る是なり古事記ハ是高志之八俣  
 遠呂智毎年來喫と有ハ此事を天淵記ハ又此去河  
 上二里有餘有深溪名天淵即大蛇之窟宅也（宅）其中大蛇



食噉國人國人將盡故歲以一人宛彼犧牲雖然如此  
人民殆盡我有八兒經七年而其七為蛇被吞之所見た  
り但犧牲宛たるは有べりし大蛇の來りて奪  
ひ吞去る事を然書せるふめり又經七年其七為蛇被  
吞と有も彼八箇少女每年為八岐大蛇所吞と云事を  
然言據へたる者やして其事の委しき過て却り  
て信こしきずあむ有ける通證小宋玉招魂云雄虺九  
と有かかく大蛇の人を吞首往來倏忽吞又以益其心  
る可又搜神記曰東越閩中有康嶺高數十里其下北  
隙中有大蛇長七八丈圍之一文土俗常懼治都尉及屬  
城長吏多有死者祭以牛羊故不得福或與人夢或諭巫  
祝欲得啗童女年十二三者有犧牲の類ふれども  
此似たる事あり外は故有る事あり一は成べし

ず小非 ○女童ハ哀登賣、訓べし事上る童女カ女の  
例の如く又ハ賣能和良波云むも僻事ありト ○且  
臨被吞ハ麻多吞礼那年登須流カ訓り第一書小今吾  
且産恐亦見吞と有る是あり但右ハ今妊身事カ  
て傳へたる者カして他傳の狀ハ異あり者あり第  
三書小素多鳴尊欲幸奇福田媛而乞之脚摩乳主摩  
乳對曰請先殺彼蛇然後幸者宜也見えたるも己小  
長トと成れ趣あり者ありヤ天淵記ハ其七為蛇  
云古事記今其可來時故哭有も共小 ○無由脱  
其殘れ一女の被吞むと爲を歎けりあり  
免ハ能賀流由無志訓べし新宮本ハ脱免を麻











痛

あま可和訓祭息を揺るの義ある可し情痛の例  
 も有り又俗小氣を痛めると云ふ是ありか猶氣痛小  
 て有べきあり又名義抄小噫をも啼をも吐をも伊多  
 年訓又和那又哀又加那志布又本具年又伊多年又宇  
 礼布又和那又哀又加那志布又本具年又伊多年又宇  
 年訓又和那又哀又加那志布又本具年又伊多年又宇  
 布又加那志布又佐年志訓三愴字を伊多年又宇礼  
 布又宇良年又何波礼布又伊多麻又波又伊多年良久  
 波ふと見え車又軫字を靈異記小伊多年訓たり  
 諸此哀傷の所小當少て古事記小今其可來時故泣  
 と有ハ上小童女置中而泣と有小對ハるハ故あり熱  
 由縁起ハ故以悲哭と有ハ上小汝等誰也何為哭之如  
 如耶と有小對ハ奉ぬる所ありハ故小珠更小悲哭と  
 ハ作るあり天淵記ハ此を無由悅故哭と有リ又地

神本紀ハ此の哀傷を加那志年訓御紀ハ然訓  
 奪の有つるハ孝德天皇五年御紀小皇太子始  
 難休と有レ哀を加那志布と訓〇素交鳴尊勅曰ハ美  
 許登能理忘多麻波久と訓リ其義ハ傳十四三十五  
 八二十二十五下ハ云ハ諸此勅曰の字小就て纂疏小  
 天子制勅書曰勅尊稱進雄神曰勅也と注させ給へるハ  
 實小然る言あるが其ハ詔書式の義解小詔書勅旨同  
 是綸言也但臨時大事為詔尋常小事為勅也と所見た  
 る如くして凡て此大神の御事ハ皇祖天神と相  
 等同會釋ハ奉るせ給ふ御事ありハ故小此事を







次わし此大神の天下の比無く尊く高く御在り坐  
す正しき證の有り然れども故有て御母國の根  
國の渡りせ給ふ可き去敢らせ給ひざる御事小依て  
天上の昇詣らせ御在り坐しけり若て天照太神と共  
小御誓の御事御在り坐しけり其清明き御心  
あむ顯りけさせ御在り坐して終小男御子を生奉らせ  
給へりける故瑞珠盟約章は是時天照太神勅曰原其  
物根則ち者是吾物也故彼五男神悉是吾兒乃取而  
子養焉と所見たる小傳十五三百五十云々一か如く谷川  
士清説小夫根系統脈在父而不在母如玉男則日神猶

父也素尊猶母也物根固出于日神非日種而何耶と云  
る實小然る説して日神ハハハ女神小御在り坐あか  
り大御父の如く素尊鳴尊ハハハ男神小渡らせ給ひ  
あかハ大御母の如く御在り坐て天壤と共小無窮き  
天津日繼の元ハ大御祖小渡らせ給へり故小此第  
四一書小素尊鳴尊曰韓郷之島是有金銀若使吾兒  
所御之國不有浮寶者未是住也の大御言有り此所見たるを  
以て此大神の御上をハハ天照坐皇太神小相並べ  
仰り奉り尊き奉り敬まひ奉り可畏畏き奉り可き御事  
あり有ける如此く天皇の大御祖神小渡らせ給へ



るハ然る物あり天照太神の日神少御在坐る小相  
並ばりて後小月神少御在坐て大地の晝夜を特別  
て御照一坐す御事ハ申すも更ふり其御兒大己貴神  
と皇御孫尊と相並ハして幽眞事顯露事とを特別  
所知着すおど皆其本の本を知り元の元を云時ハ此  
大神少係くすと云事一無ねハ實小仰ぐ可く尊む可  
く敬し可畏<sup>畏</sup>奉る可き大神少おむ渡らせ給へりけ  
る然れハ天下小在と有ゆる人の上と御在坐て天  
下ハ二無く尊く高く御在坐す皇御孫尊の御民  
と有る者<sup>六</sup>此大神を<sup>一</sup>日神小相等同<sup>一</sup>仰ぎ可  
畏<sup>畏</sup>奉る可きを若其事小違奉れ<sup>五</sup>ハ即皇御孫尊  
を輕蔑<sup>一</sup>め奉る<sup>一</sup>小當りて其罪去り所無き者<sup>一</sup>ハ  
日月の大御光を戴き奉り幽頭の大御政小願り奉る

△の限り

世人ハ<sup>一</sup>然る事意を<sup>一</sup>取り知り委<sup>一</sup>ハ○以女ハ  
明<sup>一</sup>め奉る<sup>一</sup>さ<sup>一</sup>む<sup>一</sup>ハ大なる罪人と云べ<sup>一</sup>ハ  
許能年須賣<sup>一</sup>訓べ<sup>一</sup>諸本此を以女と訓るを新宮本  
小然訓る<sup>一</sup>ふ<sup>一</sup>甚宜<sup>一</sup>け<sup>一</sup>古事記ハ是汝之女者<sup>一</sup>  
と有り<sup>一</sup>借年須賣ハ年須古の對ふり源氏<sup>一</sup>帝木卷<sup>一</sup>小御  
息男<sup>一</sup>の君等云<sup>一</sup>有り<sup>一</sup>其年須賣<sup>一</sup>云例ハ殊小多<sup>一</sup>  
して天孫降臨章<sup>一</sup>ハ汝誰之女子耶<sup>一</sup>其第二一書小皇孫  
因謂大山祇神曰吾見汝之女子欲<sup>一</sup>以爲妻<sup>一</sup>其第五一書  
小天孫幸大山祇神之女子吾田鹿葦津<sup>一</sup>其第六一書  
小又問曰其於秀起浪穗之上起八尋殿而年玉玲瓏織  
経之少女者是誰之子女耶<sup>一</sup>見え海宮遊行章ハ海神

一  
△高皇產靈尊之  
女按降于<sup>一</sup>姫<sup>一</sup>有て  
其第六一書小高皇  
產靈尊女子按降  
其萬降命<sup>一</sup>見<sup>一</sup>ハ  
其第七一書小ハ  
と美年須賣<sup>一</sup>あり  
又其正書<sup>一</sup>







其ハ同じ程の中間ありバこゝ有め界一々方より高  
 き小對ひて云べき語ありバ此所小似着ハ  
次小對曰隨勅奉矣こ有小合せて  
 古事記あり此を速須佐之男命詔其老  
 夫是汝之女者奉於吾哉云云尔是定名推手名推神自然  
 坐者恐立奉と有ハ正一々此の奉字をタマハル立奉と訓べ  
 征ある者あり又古事記高千穗宮段小故乞遺其父  
 大山津見神之時大歡喜而副其姊石長比賣令持百取  
 机代之物奉出中略尔大山津見神因返石長比賣而大耻  
 白送言我之女二竝立奉由者略と有あり此の一例  
 小備ふ可あり乳此下小因勅之曰吾兒宮首者即脚摩  
乳手摩礼也故賜号於二神曰稻田宮

△建御名方神の  
 亦不違我々大國主  
 神之命不違八事奉  
 代主神之言

△熱田縁起云々然  
 者汝當以少々奉  
 邪老相對曰不故背  
 云謝曰左右任勤  
 有小思合す

主神と有る御有狀を見奉りても吾尔  
 又礼與ふとハ詔ふす熱田縁起云々謝曰左右任勤と有る是あり例ハ  
 御言能隨尔奉良年と訓べ古事記平國段小△此葦原  
 中國者隨天神御子之命獻云云汝子等事代主神建御  
 名方神二神者隨天神御子之命勿違白訖故汝心奈何  
 尔答白之僕子等二神隨白僕之不違此葦原中國者隨  
 命既獻也と有る是あり此隨勅と云ハ不違勅と云  
 わか如し右小不違命又不違言又勿違又不違と有ハ  
引古事記の文中ハ  
 何れも隨の言を注せしか如く用ひたる者あり此二  
 を相對致し大小其意味をわき知らる可き事也  
 其創例共ハ多く傳二十二卷四百二十丁小舉たるを其  
 麻迹云々の言ハ不違云々當れ云々小心云々者云々



△各せて舞回縁起小  
むして此御紀と同一  
きんかこの所記系  
素戔嗚尊勅曰若然者  
汝當以女奉吾耶先  
御對曰不敢昔御聞  
御名皆天照大神  
之身也於是御紀即  
知天神謝曰左右任和  
所見て此の事實正  
しんや得たり故

故小今茲  
小あり ○古事記ハ此所の文殊小委く有て甚  
ニ美好なる事あり多ありけり此全文を此小擧て少  
く注す可きあり 速須佐之男命詔其老夫是汝之  
女者奉於吾哉答白恐亦不覺御名尔答詔吾者天照太  
御神之伊呂勢者也故今自天降坐也尔足名推牛名推  
神自然坐者恐立奉之所見たる其是汝之女者奉於吾  
哉之有ハ此小若然者汝當以女奉吾耶之問係させ給  
へる小同しき事已小右小託註せるか 如ハ恐亦ハ記傳  
小加斯許祁礼杼母之訓は此ハ素戔嗚大神を  
眼前小見奉り知ざるか故小容易く其御婚ひの御事

ハ許一奉り難き中ハ其御光儀を今見奉れハ甚ニ  
可畏く敬ひ奉る故小恐るこ其御名を聞奉るも  
て先初小如此く打出たるあり然るハ此大神の御事  
を四神出生章小其光彩亞日之有り第一一書ハ即  
大日靈尊及月弓尊並是質性明麗と有が如く此大神  
の光儀實小日神小亞て明麗ハ御在ハ坐カ上小  
其神性の雄健く御在ハ坐カ御有狀ハ武素戔嗚尊之  
も速素戔嗚尊之申奉る如く小渡させ給ハ天  
下小誰ハ有正小其大神ハ思知つ其  
御名を聞奉る程ハ故小如此申て名乗らせ



奉<sup>り</sup>し<sup>て</sup>ハ爲<sup>る</sup>れ<sup>け</sup>る者<sup>あり</sup>め<sup>り</sup>然<sup>ら</sup>し<sup>て</sup>其<sup>の</sup>問<sup>ふ</sup>奉<sup>る</sup>心<sup>を</sup>  
 こ<sup>の</sup>り<sup>け</sup>れ<sup>ば</sup>猶<sup>ほ</sup>豫<sup>ら</sup>し<sup>て</sup>申<sup>し</sup>出<sup>し</sup>奉<sup>り</sup>難<sup>く</sup>り<sup>け</sup>し  
 其<sup>の</sup>時<sup>の</sup>老<sup>夫</sup>婦<sup>の</sup>状<sup>も</sup>想<sup>像</sup>し<sup>て</sup>何<sup>れ</sup>に<sup>も</sup>難<sup>く</sup>事<sup>あり</sup>け<sup>し</sup>  
 不<sup>覺</sup>御<sup>名</sup>ハ其<sup>の</sup>老<sup>夫</sup>婦<sup>共</sup>ハ大<sup>神</sup>の尋<sup>常</sup>の神<sup>と</sup>し<sup>て</sup>ハ  
 御<sup>在</sup>一<sup>坐</sup>正<sup>しく</sup>素<sup>戔</sup>鳴<sup>大</sup>神<sup>ハ</sup>御<sup>在</sup>一<sup>坐</sup>せ<sup>し</sup>と  
 ハ其<sup>の</sup>御<sup>容</sup>儀<sup>の</sup>明<sup>麗</sup>一<sup>く</sup>渡<sup>り</sup>給<sup>へ</sup>る<sup>と</sup>其<sup>の</sup>御<sup>稜</sup>威<sup>の</sup>  
 健<sup>速</sup>く御<sup>在</sup>一<sup>坐</sup>す<sup>こ</sup>し<sup>て</sup>心<sup>ハ</sup>ハ<sup>此</sup>知<sup>て</sup>も有<sup>つ</sup>め  
 ざ<sup>ら</sup>其<sup>の</sup>御<sup>名</sup>也<sup>衆</sup>の御<sup>事</sup>御<sup>在</sup>一<sup>坐</sup>す<sup>迄</sup>ハ許<sup>し</sup>奉<sup>る</sup>れ  
 ざ<sup>ら</sup>信<sup>ふ</sup>古<sup>の</sup>意<sup>を</sup>し<sup>て</sup>世<sup>に</sup>美<sup>好</sup>事<sup>の</sup>極<sup>と</sup>あ<sup>ら</sup>し<sup>所</sup>思  
 え<sup>ら</sup>る<sup>其</sup>上<sup>文</sup>小<sup>我</sup>之<sup>女</sup>者<sup>自</sup>本<sup>在</sup>八<sup>稚</sup>女<sup>是</sup>高<sup>志</sup>之<sup>ハ</sup>  
 侯<sup>遠</sup>智<sup>每</sup>年<sup>來</sup>喫<sup>今</sup>其<sup>可</sup>來<sup>時</sup>故<sup>泣</sup>と語<sup>申</sup>せ<sup>る</sup>如<sup>く</sup>

在<sup>つ</sup>るハ稚<sup>女</sup>ハ喫<sup>盡</sup>さ<sup>れ</sup>て唯<sup>一</sup>人<sup>残</sup>れ<sup>る</sup>也<sup>此</sup>大<sup>神</sup>  
 の御<sup>助</sup>力<sup>を</sup>乞<sup>奉</sup>る<sup>ず</sup>ハ忽<sup>ち</sup>吞<sup>れ</sup>ら<sup>る</sup>と爲<sup>る</sup>今<sup>の</sup>際<sup>に</sup>至<sup>り</sup>  
 り<sup>て</sup>も其<sup>の</sup>御<sup>聲</sup>神<sup>の</sup>御<sup>名</sup>を覺<sup>知</sup>り奉<sup>る</sup>ず<sup>る</sup>浪<sup>ハ</sup>信<sup>が</sup>  
 び奉<sup>る</sup>事<sup>ハ</sup>も此<sup>の</sup>老<sup>夫</sup>婦<sup>も</sup>其<sup>の</sup>大<sup>山</sup>祇<sup>神</sup>の御<sup>子</sup>  
 子<sup>ハ</sup>一<sup>並</sup>之<sup>の</sup>神<sup>ハ</sup>御<sup>在</sup>さ<sup>る</sup>故<sup>ハ</sup>先<sup>問</sup>奉<sup>り</sup>て  
 後<sup>ハ</sup>立<sup>奉</sup>る<sup>む</sup>と爲<sup>る</sup>れ<sup>る</sup>者<sup>ハ</sup>一<sup>何</sup>に<sup>も</sup>何<sup>れ</sup>に<sup>も</sup>中<sup>ハ</sup>  
 云<sup>知</sup>ぬ<sup>深</sup>く味<sup>ハ</sup>ひ有<sup>る</sup>所<sup>ハ</sup>有<sup>け</sup>り然<sup>れ</sup>ハ此<sup>の</sup>第<sup>三</sup>  
 一<sup>書</sup>小<sup>素</sup>戔<sup>鳴</sup>尊<sup>欲</sup>幸<sup>高</sup>稻<sup>田</sup>媛<sup>而</sup>先<sup>之</sup>脚<sup>摩</sup>乳<sup>主</sup>摩<sup>乳</sup>  
 對<sup>曰</sup>請<sup>先</sup>殺<sup>彼</sup>蛇<sup>而</sup>然<sup>後</sup>幸<sup>者</sup>宜<sup>也</sup>と有<sup>ら</sup>どハ此<sup>の</sup>要  
 と有<sup>る</sup>其<sup>の</sup>老<sup>夫</sup>婦<sup>の</sup>心<sup>を</sup>記<sup>し</sup>漏<sup>ら</sup>れ<sup>な</sup>る<sup>傳</sup>し<sup>て</sup>事<sup>足</sup>

△熱田縁起ハ老翁  
 對曰不敢言抑聞  
 御名有れば此  
 右の古事記の答  
 恐亦不覺見御名  
 有らば如やうと云

〇月本書紀傳 三三  
 〇年四



いぬ心うちむ為めを古事記の右の傳ふむ實小愛  
たぐ所思えたりけり上古よりして婚儀の重りり  
五世王者聽唯丑五世玉不得娶親王と有少て知れり  
り然る小紀略小延暦十三年九月丙戌詔見任大臣良  
家子孫許娶三世以下但藤原氏者累代相承攝政不絶  
以此論云不可同等殊聽娶二世以下者有て其法稍  
弛したるを後小皇女をたご人臣の家小降一嫁  
め給ふ御事の御在坐すふに至れり此老夫婦小  
お恥はつ御事給ひ其治め給ひ道も必御在坐  
さおを君臣の御間甚近く成以て行て果てハ君上  
を輕め奉る訓媒と吾者天照太御神之伊呂勢者也と  
成ずしも非ずふむハ己尊の御名を以て顯ハ給はずして日神の御兄  
と御名乘為させ給へり抑其素戔鳴尊と申奉る御  
名の其時ハ在つるを隱して然詔給へるふハ有べり

くず其素戔鳴尊と申奉るハ神性の健く速く進め  
る小御在坐故小傍始より然称奉りて終小ハ其御  
名と成れり天照太神を奉りて大神の御身自ハ唯右の如く常小他  
小對ひて然御名乘セ御在坐ける御事と所見た  
り其ハ天孫降臨章第一一書小天照太神之子所幸道  
路有如此居之者誰也敢問之衢神對曰聞天照太神之  
子今當降行故奉迎相待と有も皇御孫尊小未此時御  
名御在坐其第六一書乃用真床西復倉累皇孫天津彦根火瓊杵根尊  
而排披天八重雲以奉降故称此神曰天國饒石彦火瓊  
杵尊と有が如く其御天降の狀の饒しりつる故



小其御名ハ定リ坐る可<sup>レ</sup>又此ハ天照  
 太御神之伊呂勢者也<sup>ト</sup>宜シ右小皇御孫尊の御名を  
 指<sup>ズ</sup>して天照太神之子と申<sup>ス</sup>るを以て凡此天  
 地の間ハ天照太神ハ益<sup>リ</sup>て貴神御在<sup>レ</sup>坐<sup>ス</sup>る  
 故<sup>ニ</sup>其<sup>ハ</sup>太神を先体小居<sup>ニ</sup>置<sup>テ</sup>後<sup>ニ</sup>其<sup>ハ</sup>  
 の定格あり<sup>レ</sup>を知<sup>ベ</sup>又此ハ如此<sup>ク</sup>伊呂勢者也<sup>ト</sup>  
 見<sup>尊</sup>と申<sup>ス</sup>一神の別<sup>ニ</sup>御在<sup>レ</sup>坐<sup>ス</sup>る御事をモ亦此  
 小<sup>ハ</sup>徴<sup>ス</sup>云<sup>ベ</sup>其<sup>ハ</sup>此外<sup>ニ</sup>御在<sup>レ</sup>坐<sup>ス</sup>せ<sup>ル</sup>モ亦ハ  
 自<sup>レ</sup>の御事の<sup>レ</sup>を然<sup>レ</sup>名<sup>ス</sup>諸<sup>ニ</sup>其<sup>ハ</sup>伊呂勢と申<sup>ス</sup>る同母  
 せ給<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>者<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>を<sup>レ</sup>や  
 の御兄弟小御在<sup>レ</sup>坐<sup>ス</sup>由を以て詔給<sup>ハ</sup>る<sup>ニ</sup>ふ<sup>リ</sup>に賢  
 天皇六年御紀ハ古者不言<sup>ス</sup>兄弟身長幼女以男称<sup>ス</sup>兄弟男以

徴

△但熱田縁起ハ  
 曰我是天照太神之  
 弟也此是翁極即  
 知天神之所見たれ  
 ハ古事記ハ本ハ  
 伊呂勢と有<sup>レ</sup>む  
 也知<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>ざ<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>  
 リ地神本紀ハ此文  
 吾者天照太神之弟  
 也と有<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>證<sup>ス</sup>と爲<sup>ス</sup>  
 一  
 △其本ハ母を伊呂  
 勢と云<sup>ハ</sup>出<sup>タ</sup>ル  
 事<sup>ハ</sup>して其<sup>ハ</sup>

女称<sup>レ</sup>妹と有<sup>ル</sup>是<sup>ハ</sup>あり<sup>ニ</sup>諸伊呂勢ハ伊呂妹の對<sup>アリ</sup>伊  
 呂泥ハ伊呂杼の對<sup>アリ</sup>又即子即姫を伊良都古伊良  
 都賣<sup>ト</sup>訓<sup>ス</sup>某入彦某入姫<sup>ト</sup>申<sup>ス</sup>伊理此<sup>ハ</sup>同<sup>ト</sup>  
 して伊良伊理伊呂共<sup>ハ</sup>同胞の兄弟姉妹を並<sup>ニ</sup>ふ時  
 小限<sup>ル</sup>事<sup>ハ</sup>少<sup>ク</sup>異母兄弟<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>ハ<sup>ハ</sup>庶<sup>ハ</sup>兄<sup>ハ</sup>庶<sup>ハ</sup>妹<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て其<sup>ハ</sup>  
 ハ<sup>ハ</sup>縦<sup>ニ</sup>小物<sup>ト</sup>爲<sup>ス</sup>る<sup>ニ</sup>及<sup>テ</sup>何れ<sup>モ</sup>右等<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>入<sup>レ</sup>字<sup>ノ</sup>意<sup>ハ</sup>小  
 して互<sup>ニ</sup>小相親<sup>シ</sup>む言<sup>アリ</sup>け<sup>リ</sup>然<sup>リ</sup>て此<sup>ハ</sup>素戔鳴大  
 神<sup>ノ</sup>日神を指<sup>奉</sup>せ給<sup>ハ</sup>ふ<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>姉<sup>ト</sup>申<sup>奉</sup>る<sup>ニ</sup>  
 せ給<sup>ハ</sup>して伊呂妹<sup>ト</sup>ハ<sup>ハ</sup>申<sup>サ</sup>せ給<sup>ハ</sup>ざ<sup>リ</sup>け<sup>レ</sup>ども此<sup>ハ</sup>  
 唯<sup>ニ</sup>其<sup>ハ</sup>三神<sup>ト</sup>向<sup>リ</sup>せ給<sup>ハ</sup>ひ<sup>テ</sup>其<sup>ハ</sup>日神の御同胞<sup>ト</sup>御在<sup>レ</sup>



前(ルニヤ)  
 △相熱田緑起(カ答)  
 曰我足天照大神之  
 弟也於是翁媪即  
 知天神所見(カ知)  
 言事(カ言)也奈伊  
 呂波(カ言)と有(カ知)  
 べ(カ知)ら(カ知)ざ(カ知)  
 本(カ知)記(カ知)も(カ知)  
 照(カ知)本(カ知)神(カ知)  
 之(カ知)才(カ知)と(カ知)  
 有(カ知)る(カ知)を(カ知)  
 證(カ知)す(カ知)る(カ知)べ(カ知)  
 今(カ知)其(カ知)母(カ知)を(カ知)伊(カ知)  
 呂(カ知)波(カ知)と(カ知)云(カ知)  
 其(カ知)其(カ知)

坐す由を己く示させ御在り坐むとして吾者天照太  
 御神之伊呂勢者也とハ御名乗爲させ給へる者なり  
 て此御言を受賜つして然御在り坐さば素戔鳴大神  
 あり御在り坐けり心知て敬よひ恐と奉れ  
 る所ハ至杜り者ありけり一儲其伊呂勢あそ  
 伊呂を入の義ありと云ハ己ハ傳ハ<sup>ハ</sup>五<sup>十</sup>ハ父母を加  
 曾伊呂波と云ハ就て注せるが如く其を知波と  
 云ル血脉又腹の義ある事等しく伊呂波と云ハ入腹  
 と云事ありて其伊呂ハ母の方ありハ我腹内ハ容て  
 産出す意を以てまひ子の方ありハ母胎ハ入て其よ

り生來る義あり云ふれハ母ハ云も子め云も其本一  
 なり者あり其<sup>伊呂波</sup>兄と妹の言を以れハ伊呂勢と  
 成り伊呂妹と成り又姊<sup>アネ</sup>の言を以れハ伊呂泥と  
 成り伊呂婿と成り又子<sup>コ</sup>の言を以れハ郎子と成  
 り郎<sup>イラノ</sup>姫と成り又彦<sup>ヒコ</sup>の言を以れハ入彦と成り入  
 彦と成れる者あり其中ハ伊呂泥ハ兄<sup>アネ</sup>ハ姊<sup>アネ</sup>ハ通  
 ハ一云言少ヤ古事記白擣原宮段ハ伊呂兄<sup>イロセ</sup>と有る御  
 紀ハ兄字を書て伊呂和訓れたり其ハ唯片假字  
 以て傍書せるふれハ書違へども云つべし  
 を和名抄ハ兄男子先生爲兄一云昆和名古乃加美日



本紀云知名伊呂祢と有を誤とも定云ふ可くいざれ  
ハ伊呂阿ホの言より約りて此も亦伊呂泥ハ成れ  
る者と見えたり其上傳十五十三丁又ハ云ふが如く  
卿を那泥ともも汝卿と云事あるが兄を阿ホと云も  
然して此ホネ泥と共々尊祢ネと云ハ異あり  
ざれハ右の如く兄あり卿あり伊呂泥と云て事の違  
ふハ非ざる者あるが然るを此即子即姫と色津  
伊呂波と云ハ色身ハ母子色津姫の義ハ説き母を  
可ありもいざれ色ハの事ありて云説ハ大ハ遠キ違有る者  
あり男色ハ女色ハ愛ハのころハ色某ハも云ハいざれ  
事ハ無さハ唯ハ男女の子を然ハ云ハ事心得ず其上色  
身ハある事ハ外國の轉りあり我ハ皇大御國の故今  
上古ハ且ても人の云ハいハ事あるを如何ハ為む

自天降坐也と詔給へるハ其上小故所避而降出雲國  
之肥河上在鳥髮地ハ有ハ其記の地より書る語ある  
ハ此ハありハ正ハく其大神の御言ハ宣ハひ出させ給へ  
るありハ此を以て證ハとして右ハ所避而の語有ハ誤  
ある事を知ハ足れりハ云ハ其ハ傳二十二二百五  
より始て此卷首より追ハハ事實を徴ハ論云ハ十四丁如  
く此素戔嗚大神の天上より所逐れて初て天降り御  
在ハ坐ハ御時ハ皇國の内ハ在申る衆神ハ此ハ置  
奉ハず共小距て留め奉ハるがハ終ハ外國の地  
ハ先落着せさせ御在ハ坐けり此第四一書ハ是時素



素鳴尊即其子五十猛神降<sub>レ</sub>到於新羅國居曾戶茂梨之  
處と有る是あり其次小<sub>レ</sub>遂<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>埴上作舟乘之東渡到出  
雲國敷川上所在鳥<sub>レ</sub>上之岑と有れども其ハ誤<sub>レ</sub>して  
其初て更渡<sub>レ</sub>し給ひし著せ給へりしハ築紫洲内の  
事<sub>レ</sub>して其より此大八洲國を青山と成<sub>レ</sub>給へる時  
小ハ未出雲國小御事跡ハ非<sub>レ</sub>の事著明<sub>レ</sub>其後此土  
の<sub>レ</sub>高天原小參上<sub>レ</sub>せ御在<sub>レ</sub>坐て其再度天降の御  
在<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>けた地ある此第二一書小是時素<sub>レ</sub>鳴尊下<sub>レ</sub>到  
於安藝國可愛之河上也と所見たる是<sub>レ</sub>即出雲國  
小御在<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>著せ<sub>レ</sub>給へる始ありける<sub>レ</sub>諸此故今

自天降坐也と有ハ初度の御事<sub>レ</sub>して御在<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>ざ  
慥ふる證有<sub>レ</sub>り其老夫婦ハ候遠呂智の形狀を語申  
せる語の中亦其身生<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>羅及檜楳と有る檜楳ハ此  
第五一書小乃拔鬚髻散之即成<sub>レ</sub>杖又<sub>レ</sub>拔散胸毛是成<sub>レ</sub>檜  
と有<sub>レ</sub>か如く其ハ素<sub>レ</sub>鳴大神の御身より化出たる物  
也<sub>レ</sub>此顯國の本<sub>レ</sub>より有<sub>レ</sub>る其大蛇の背小迄  
も生立<sub>レ</sub>つ程小至<sub>レ</sub>れるハ悉く大八洲國の青山と成<sub>レ</sub>盡  
し極まりての上の事ありければ先<sub>レ</sub>天降<sub>レ</sub>御在<sub>レ</sub>  
坐て然<sub>レ</sub>る御功を立<sub>レ</sub>させ御在<sub>レ</sub>坐<sub>レ</sub>けむより何<sub>レ</sub>十  
年を<sub>レ</sub>經たりけむ知<sub>レ</sub>べき小非<sub>レ</sub>ず若<sub>レ</sub>て其再天上小昇



詣りて御在り坐てより以來も決して久しき年序を  
也經たりけむ其夫婦の心も其可畏<sup>畏</sup>御光儀を見  
奉り上たむむふ誰<sup>ハ</sup>御在り坐む此大神も御在  
り坐<sup>ハ</sup>思ふ<sup>ハ</sup>も今天上より此も天降り御  
在り坐<sup>ハ</sup>着せさせ御在り坐む思ひも係奉り  
り<sup>ハ</sup>筋ありければ其御名を問奉れ<sup>ハ</sup>合せて今自  
天降坐也<sup>ハ</sup>對へさせ給へり<sup>ハ</sup>御事あるむ有ける  
然<sup>ハ</sup>古事記も其御天降の御事を合せて一も爲  
る<sup>ハ</sup>中古も出来り<sup>ハ</sup>事少く古き傳ふ<sup>ハ</sup>上章第三一  
書の如く有つ<sup>ハ</sup>む事石も引る故今自天降坐也<sup>ハ</sup>有

△下<sup>ハ</sup>速復佐之男命  
坐<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>可<sup>ハ</sup>心  
持<sup>ハ</sup>起<sup>ハ</sup>我<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>命<sup>ハ</sup>大神  
之<sup>ハ</sup>神<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>狗<sup>ハ</sup>神  
知<sup>ハ</sup>天神<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>小思合  
可<sup>ハ</sup>可<sup>ハ</sup>可<sup>ハ</sup>

觀

る御言も本着て其前後の事實を合せて曉る可き者  
少<sup>ハ</sup>む有ける 又此上も是時素戔嗚尊自天而降到於  
出雲國敷之川上<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>も右も云<sup>ハ</sup>第三一  
一書も下<sup>ハ</sup>到<sup>ハ</sup>於<sup>ハ</sup>安藝國可愛之川上也<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>も同<sup>ハ</sup>傳ふ  
る<sup>ハ</sup>少<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>章正書の終<sup>ハ</sup>已<sup>ハ</sup>而<sup>ハ</sup>竟<sup>ハ</sup>遂<sup>ハ</sup>降<sup>ハ</sup>焉<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>も  
ハ<sup>ハ</sup>續<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ず<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>第三一<sup>ハ</sup>書<sup>ハ</sup>も是<sup>ハ</sup>後<sup>ハ</sup>素<sup>ハ</sup>戔<sup>ハ</sup>嗚<sup>ハ</sup>尊<sup>ハ</sup>曰<sup>ハ</sup>諸<sup>ハ</sup>神<sup>ハ</sup>遂  
我<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>當<sup>ハ</sup>永<sup>ハ</sup>去<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>何<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>與<sup>ハ</sup>我<sup>ハ</sup>仰<sup>ハ</sup>相<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>而<sup>ハ</sup>檀<sup>ハ</sup>自<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>去<sup>ハ</sup>歟<sup>ハ</sup>迺<sup>ハ</sup>復  
扇<sup>ハ</sup>天<sup>ハ</sup>扇<sup>ハ</sup>國<sup>ハ</sup>上<sup>ハ</sup>詣<sup>ハ</sup>于<sup>ハ</sup>天<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>今<sup>ハ</sup>則<sup>ハ</sup>奉<sup>ハ</sup>觀<sup>ハ</sup>已<sup>ハ</sup>訖<sup>ハ</sup>云<sup>ハ</sup>已<sup>ハ</sup>而<sup>ハ</sup>復  
還<sup>ハ</sup>降<sup>ハ</sup>焉<sup>ハ</sup>有<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>續<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>ず<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>意<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>補<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>ざる<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>も大  
書<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>如<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>文<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>無<sup>ハ</sup>れ<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>其<sup>ハ</sup>意<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>補<sup>ハ</sup>ひ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>ざる<sup>ハ</sup>時<sup>ハ</sup>も大  
下<sup>ハ</sup>も云<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>事<sup>ハ</sup>共<sup>ハ</sup>を<sup>ハ</sup>然<sup>ハ</sup>坐<sup>ハ</sup>者<sup>ハ</sup>公<sup>ハ</sup>預<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>素<sup>ハ</sup>戔<sup>ハ</sup>嗚<sup>ハ</sup>尊<sup>ハ</sup>大神<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>此  
引<sup>ハ</sup>合<sup>ハ</sup>せ<sup>ハ</sup>見<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>可<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup> 御<sup>ハ</sup>大神<sup>ハ</sup>も勅<sup>ハ</sup>任<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>奉<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>給<sup>ハ</sup>へ<sup>ハ</sup>神  
天下の大君主宰の大神も御在り坐せ<sup>ハ</sup>其大神の御  
事を此國土も在り有ゆる國神も<sup>ハ</sup>誰<sup>ハ</sup>外<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>  
く知奉り<sup>ハ</sup>ざると云事の有む然るを其老夫婦も此大



神ハ天上ニ復參昇ルセ御在ニ坐ケル心得テ有ツ  
ルモ今此處ニ御在ニ坐ムト如何ニ知事有  
む然ルモ此ニ入ルセサセ御在ニ坐ケル小就テ其  
斯ル災厄の時ニ臨ミテ其御扶助を仰乞奉ル大神  
の御心アル其女を己尊の御物ヤケ其大蛇を殺シ  
テ其災害の根を断セサセ御在ニ坐ムト即其女を奉  
ル可キ由を仰宣ヘル小御名を不知ト恐ルト申上  
ルルモ對ヘテ吾者天照太御神之伊呂勢者也故  
今自天降生也ト詔ヘル小就テ然坐即天神ノ渡ル給ヒテ其素戔嗚大神小  
御在ニ坐ケルト自得リテ此小其大御言を肯伏シ奉

ル所アル小其例ハ此章第六一書小大己貴神の  
幸魂奇魂神の頭ハれ出サセ給ヘル所小是時大己貴  
神問曰然則汝是誰耶對曰吾是汝之幸魂奇魂也大己  
貴神曰唯然迺知汝是吾之幸魂奇魂略ト有テ迺知ト  
同トトテ彼方ヨリ詔給ヘルを待取奉リテ此方小  
テ決著ガム所アルバ此も然坐者の下小右小其意を  
補ヒ云ルガ如キ言を加ヘテ見ズルハ其深義ハ見得  
難キ者アルズ然レハ此小吾者天照太御神之伊  
呂勢者也ト有テ其大神の御名を  
名乗ルセ給ハルト此小其老夫婦ニ神の然坐者ト  
對ヘ奉リテ其御名を擧テ申サレト小甚ト甘ク  
味有ル所アル恐立奉ル上小是汝之女者奉於吾哉  
を思ふ可

△熱田縁起小於見翁  
矩知天神謝曰左右任  
斬ト有テ當ルハ此  
謝曰ト加テ古麻理會  
ト因訓ト是ヨリ傳ル



係させ給へる其御言小應へて其畏伏の状を申奉る  
所ありて此小素戔嗚尊勅曰若然者汝當以女奉吾  
耶カニヨリ有カニヨリ小對奉りて隨勅奉其カニヨリ申せり小相同カニヨリトカニヨリ所  
ありて此恐ハ加カニヨリ斯カニヨリ古志カニヨリト訓て即其隨勅の二字小  
當り其隨勅ハ即不違勅ト云小其意味同ト事上カニヨリ  
ニ小註カニヨリるを見て知べし備此加志古志ト云言ハ物を  
兼伏カニヨリヒ奉る語ありて其例共を一ニ見集むる小其  
古事記平國段小坐天安河ニ上之天石屋名伊都之尾  
羽張神是可遺カニヨリ略故尔使天迦久神問天尾羽張神之時  
答白恐之仕奉然於此道者僕子建御雷神可遺乃貞進

と有ハ其葦原中國小征伐の御使小差カニヨリ給へる御事  
ありて其畏カニヨリこよりを申す所あり故小恐之仕奉ト  
申給ひ又其神の自行向ひ給ハズとも其子建御雷神  
を天降カニヨリして事カニヨリの濟カニヨリあり所あり故小其を戻カニヨリさて然  
云々トハ申給へるあり其次小是以此二神降カニヨリ到出雲  
國伊那佐之小濱略問其大國主神言略汝之字志波祁  
流葦原中國者我御子之所知國言依賜故汝心奈何尔  
答白之僕者不得自我子八重言代主神是可白カニヨリ略故尔  
遺天鳥船神徵來八重事代主神而問賜之時語其父大  
神言恐之此國者立奉天神之御子即蹈カニヨリ頤其船而天逆



乎矣於青柴垣打成而隱也。有也其御父大國主大神  
を進めて共小天神の御言を肯伏ひ奉る所あり故小  
恐之と申給ひて此國を避奉る事小就て異義御在し  
坐ざる由を明し白給へるあり其文不引續きて故尔  
問其大國主神今汝子事代主神如此白訖亦有可白子  
乎於是亦白之亦我子有建御名方神除此而者無也  
故追往而追到科野國之洲羽海將殺時建御名方神白  
恐莫殺我除此地者不行他處略中此葦原中國者隨天神  
御子之命獻有有恐也今殺され奉る小就て申給へ  
るあず上と同しく此國を奉る事を肯ひ奉り

由をも相兼て申給へるなり此恐ハ二義小且れり又  
其朝倉宮段有葛城神の顯出させ御在し坐ける所  
小天皇於是惶畏而白恐我大神有宇都志意美者不覺  
白而大御刀及弓矢始而脱百官人等所服之衣服以拜  
獻有有此ハ右の三例ハ異ありて唯俗小恐入  
り奉る意味を以て詔給へるなり此恐ハ常小云ふ加  
志古志少て祝詞宣命あり不掛麻久畏役と多く用ひ  
るなり是少て右の事を兼伏ひて云ふ恐と同言ふ  
かゝ其用ふる意あり異ありける然れども其加志古  
志云ふ本より二無なり然云別つと雖も其小物小



南政倉庫

清印  
文庫

隔を際<sup>アサト</sup>として立て輕蔑<sup>カニコ</sup>りかま<sup>カニコ</sup>してさる謂ふりけ  
 れ<sup>カニコ</sup>此の本ハ加志古ハ彼處<sup>カニコ</sup>ニ云事少ク下志<sup>カニコ</sup>と  
 伎<sup>カニコ</sup>りも活<sup>カニコ</sup>くハ其形狀を云ふ言とあむ思め<sup>カニコ</sup>り<sup>カニコ</sup>  
 け<sup>カニコ</sup>然れ<sup>カニコ</sup>ハ物を懼<sup>カニコ</sup>りて加志古志と云ハ我<sup>カニコ</sup>とハ甚<sup>カニコ</sup>く  
 語書<sup>カニコ</sup>ふ<sup>カニコ</sup>小人<sup>カニコ</sup>を持崇<sup>カニコ</sup>む<sup>カニコ</sup>事<sup>カニコ</sup>を加志豆<sup>カニコ</sup>又<sup>カニコ</sup>中昔<sup>カニコ</sup>の物  
 甚<sup>カニコ</sup>下<sup>カニコ</sup>物<sup>カニコ</sup>ハ爲<sup>カニコ</sup>る<sup>カニコ</sup>小<sup>カニコ</sup>出<sup>カニコ</sup>たる<sup>カニコ</sup>言<sup>カニコ</sup>あり<sup>カニコ</sup>又源氏<sup>カニコ</sup>帝<sup>カニコ</sup>本<sup>カニコ</sup>卷<sup>カニコ</sup>小  
 有<sup>カニコ</sup>る<sup>カニコ</sup>畏<sup>カニコ</sup>こ<sup>カニコ</sup>より<sup>カニコ</sup>も置<sup>カニコ</sup>す<sup>カニコ</sup>心<sup>カニコ</sup>の内<sup>カニコ</sup>ハ思<sup>カニコ</sup>ふ<sup>カニコ</sup>事<sup>カニコ</sup>ハ隱<sup>カニコ</sup>一<sup>カニコ</sup>敢<sup>カニコ</sup>ず<sup>カニコ</sup>云<sup>カニコ</sup>と  
 有<sup>カニコ</sup>る<sup>カニコ</sup>畏<sup>カニコ</sup>こ<sup>カニコ</sup>より<sup>カニコ</sup>ハ語<sup>カニコ</sup>り<sup>カニコ</sup>申<sup>カニコ</sup>す<sup>カニコ</sup>所<sup>カニコ</sup>あり<sup>カニコ</sup>故<sup>カニコ</sup>ハ云<sup>カニコ</sup>少<sup>カニコ</sup>て<sup>カニコ</sup>心<sup>カニコ</sup>を置<sup>カニコ</sup>さ<sup>カニコ</sup>る<sup>カニコ</sup>と  
 云<sup>カニコ</sup>然<sup>カニコ</sup>る<sup>カニコ</sup>ハ貴<sup>カニコ</sup>人<sup>カニコ</sup>の御<sup>カニコ</sup>前<sup>カニコ</sup>ふ<sup>カニコ</sup>ど<sup>カニコ</sup>侍<sup>カニコ</sup>り<sup>カニコ</sup>して<sup>カニコ</sup>ハ際<sup>カニコ</sup>と<sup>カニコ</sup>く  
 禮<sup>カニコ</sup>を盡<sup>カニコ</sup>し<sup>カニコ</sup>て<sup>カニコ</sup>恐<sup>カニコ</sup>れ<sup>カニコ</sup>敬<sup>カニコ</sup>ふ<sup>カニコ</sup>可<sup>カニコ</sup>き<sup>カニコ</sup>事<sup>カニコ</sup>ふ<sup>カニコ</sup>れ<sup>カニコ</sup>と<sup>カニコ</sup>も親<sup>カニコ</sup>し<sup>カニコ</sup>き<sup>カニコ</sup>申<sup>カニコ</sup>間<sup>カニコ</sup>ふ  
 る<sup>カニコ</sup>故<sup>カニコ</sup>ハ禮<sup>カニコ</sup>儀<sup>カニコ</sup>が<sup>カニコ</sup>ま<sup>カニコ</sup>し<sup>カニコ</sup>き<sup>カニコ</sup>所作<sup>カニコ</sup>を<sup>カニコ</sup>ル<sup>カニコ</sup>爲<sup>カニコ</sup>ぬ<sup>カニコ</sup>を<sup>カニコ</sup>右<sup>カニコ</sup>の<sup>カニコ</sup>如<sup>カニコ</sup>く<sup>カニコ</sup>云<sup>カニコ</sup>る  
 あり<sup>カニコ</sup>又<sup>カニコ</sup>今<sup>カニコ</sup>も貴<sup>カニコ</sup>人<sup>カニコ</sup>より<sup>カニコ</sup>御<sup>カニコ</sup>事<sup>カニコ</sup>の<sup>カニコ</sup>有<sup>カニコ</sup>る<sup>カニコ</sup>從<sup>カニコ</sup>ひ<sup>カニコ</sup>奉<sup>カニコ</sup>る<sup>カニコ</sup>事<sup>カニコ</sup>小<sup>カニコ</sup>畏<sup>カニコ</sup>ま  
 る<sup>カニコ</sup>と<sup>カニコ</sup>云<sup>カニコ</sup>ル<sup>カニコ</sup>此<sup>カニコ</sup>の<sup>カニコ</sup>老<sup>カニコ</sup>夫<sup>カニコ</sup>婦<sup>カニコ</sup>が<sup>カニコ</sup>其<sup>カニコ</sup>女<sup>カニコ</sup>の<sup>カニコ</sup>事<sup>カニコ</sup>を  
 恐<sup>カニコ</sup>立<sup>カニコ</sup>奉<sup>カニコ</sup>と<sup>カニコ</sup>申<sup>カニコ</sup>され<sup>カニコ</sup>し<sup>カニコ</sup>と<sup>カニコ</sup>相<sup>カニコ</sup>似<sup>カニコ</sup>通<sup>カニコ</sup>ひ<sup>カニコ</sup>たり<sup>カニコ</sup>



